

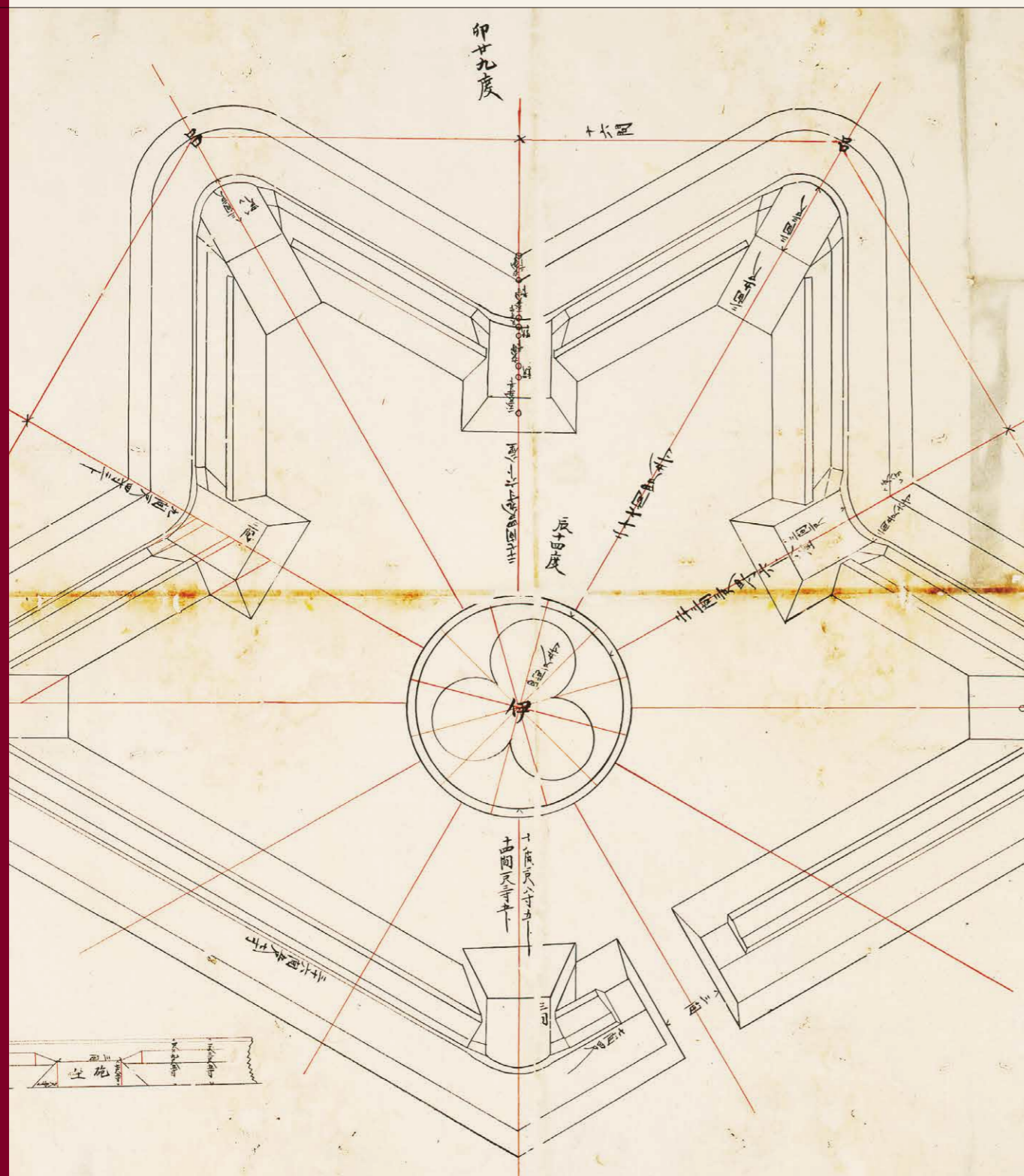
博物館だより

K O B E C I T Y M U S E U M

No.118

2020・秋

- 特別展 なごみ 和のガラス—暮らしを彩ったびいどろ、ぎやまん P.2
- 特別展 和田岬砲台史跡指定100年記念 大阪湾の防備と台場展 P.3
- 企画展 神戸源平巡り—『平家物語』の舞台を訪ねて— P.4



スケジュール						
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
休館日	1・2・5・12・19・26	2・9・16・24・30	1~4・7・14・21・28~31	1~4・12・18・25~31	1~5・8・15・22	1~8・15・22・29~31
特別展示室1 (3階)					2/6~3/28 企画展 神戸源平巡り—『平家物語』の舞台を訪ねて—	
南蛮美術館室 (2階)	10/3~11/23 特別展 <small>なごみ</small> 和のガラス —暮らしを彩ったびいどろ、ぎやまん		12/5~1/24 特別展 つなぐ TSUNAGU — THE POWER OF KOBE CITY MUSEUM		2/6~3/28 特別展 和田岬砲台史跡指定100年記念 大阪湾の防備と台場展	
特別展示室2 (2階)						
ホール (1階)						
神戸の歴史展示 (1階)	港の歩みを中心に、神戸の歴史と文化を紹介する展示					
地域文化財展示 (1階)	10/3~11/23 明治期着色写真の世界		12/5~1/24 神戸の曼荼羅		2/6~3/28 神戸から出土した瓦・須恵器	
コレクション展示【考古・歴史】 (2階)	10/3~11/23 古墳時代の造形		12/5~1/24 建造物の設計と意匠		2/6~3/28 神戸と“清盛さん”	
コレクション展示【美術】 (2階)	10/3~11/23 人物表現の洋風趣味Ⅱ		12/5~1/24 生誕320年 俵山 <small>いっぴん</small>		2/6~3/28 <small>きよあらん</small> 異国趣味のやきもの—京阿蘭陀	
コレクション展示【古地図】 (2階)	10/3~11/23 旅と名所		12/5~1/24 江戸時代の都市図		2/6~3/28 地図皿、ずらり	
コレクション展示【びいどろ・ぎやまん・ガラス】 (2階)	10/3~11/15 輸入ぎやまん	11/17~1/24 あかり・ランプ			2/6~3/28 手彫り切子の名品	
ザビエル (2階)	「聖フランシスコ・ザビエル像」複製展示 オリジナル像の展示は11/3~11/23					
桜ヶ丘銅鐸・銅戈 (2階)	「国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈」実物展示					

展覧会情報

特別展「つなぐ TSUNAGU —THE POWER OF KOBE CITY MUSEUM」

会期：令和2年(2020)12月5日(土)~令和3年1月24日(日)
 主催：神戸市立博物館
 新型コロナウイルスの感染拡大によって見えにくくなっているさまざまな「つながり」を見つめなおす展覧会です。過去と未来、視えるものと視えないもの、心と心…博物館のコレクションを語り手とする「つなぐ」を巡る6つのストーリーが皆様をお待ちしています。

花下群舞図(右隻・部分) 安土桃山時代 当館蔵

神戸市立博物館だより
No.118(2020・秋)

発行年月日 令和2年(2020)10月6日
 編集・発行 神戸市立博物館
 〒650-0034
 神戸市中央区京町24番地
 TEL.(078)391-0035
 FAX.(078)392-7054

神戸市立博物館公式ホームページ
<https://www.kobecitymuseum.jp/>

公式Twitter・Facebook @kobemuseum

神戸市広報印刷物登録 令和2年度 第348号 広報印刷物規格 A-5類

表紙/神戸市指定有形文化財「和田岬・湊川砲台(台場)関係史料」のうち「和田岬石堡塔外甕壁之図」慶応元年(1865)12月 当館蔵

リサイクル選性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

和のガラス

—くらしを彩ったびいどろ、ぎやまん—

令和2年10月3日(土)～
11月23日(月・祝)

本展は、前号に掲載の通り7月の開幕を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、会期を変更して開催する運びとなりました。前号の記事に引き続き、本展のコンセプトを振り返るとともに、出品作品をご紹介します。

和ガラスの魅力伝える

本展でお伝えしたいことは、江戸時代には、ヴァラエティ豊かなガラス器が製造されていたこと、さらに当時の人々がどのような場面で、どのように使用していたのかという点です。本展ではガラス器とともに、絵画・文献資料、収納箱に残る墨書などを読み解くことで、くらしを彩ったガラス器の様相を浮き彫りにしたいと考えています。

江戸時代には、「びいどろ」、「ぎやまん」と呼ばれていた和ガラスは、長崎貿易を通じてもたらされたヨーロッパ製ガラス器や技法書などを参考に日本でも製造されるようになりました。一方で、江戸時代の日本製ガラスは、中国宋代のガラス製造

法に基づく鉛ガラスで、当時のヨーロッパ製ガラスとは異なる材質だったのです。限られた情報のもとで製作されたびいどろ、ぎやまんの中には、かたちにゆがみのあるもの、透明といえども、鉄分によって青色や黄色味を帯びたものも少なくありません。今日の私たちは、これらの特徴に心を惹き付けられるのかもしれませんが、見るものを和ませる、和ガラスの魅力に触れる機会となれば幸いです。



「青色・黄色鶴首ガラス徳利」
当館蔵
(びいどろ史料庫コレクション)

くらしの中の和ガラス

本展は成形や装飾技法を紹介する「和ガラスのかたち」、当時の人々が使用していたガラス器に焦点をあてる「くらしの中の和ガラス」、19世紀に登場する「和製ぎやまん」、箱書きなどを読み解きながらガラス器の伝来をさぐる「伝わる和ガラ

ス」の4章から成ります。「くらしの中の和ガラス」では、当時の人々がどのような場面でガラス器を使用していたのかを「たべる」「のむ」「かざる」「いやす」の4つのテーマのもと、ご紹介します。

「たべる」「のむ」では、江戸時代に中国から伝来した卓袱料理や普茶料理の席で使用されたと考えられる器も展示します。江戸山谷にあった料亭「八百善」の様子を記した『江戸流行料理通大全』(天保6年「1835」刊記)には、宴席の様子を描いた挿絵が掲載されています。そこには、食膳を飾るガラス製と考えられる脚付杯を確認できます。酒器の一つである可盃は、注がれた酒を飲み干すまで、床に置くことができませぬ。脚の球状装飾には、ティアドロップと呼ばれる気泡が封じ込められています。お酒を注いだ時の輝きは、きつと宴席を盛り上げたことでしょう。



「ガラス可盃」
斉藤コレクション蔵

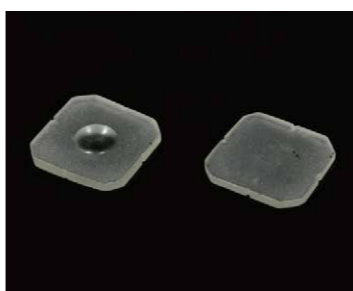
「かざる」では、櫛、筭、簪、印

籠といった装飾品、花生、煙草盆、行灯などの調度品を採りあげます。当時の人々が楽しんでお洒落に想像を巡らせてみてください。

「いやす」では、理化・医療器具としてのガラス器も製作されていたことをご紹介します。2枚1組の方形板状ガラスからなる牛痘盤は、種痘の治療薬である牛痘苗を保管するための容器です。嘉永2年(1849)、長崎での接種成功により、日本国内に広まったといわれています。西洋医学の普及とともに需要が高まった、理化・医療器具としての和ガラスという、意外な側面にもスポットをあてます。

本展では、初公開作品を含めて約160件の和ガラスを展覧します。秋の展覧会日和、和ガラスの名品を、「輝き」と「癒やし」に満ちた会場でお楽しみいただければ幸いです。

(中山 創太)



「牛痘盤」 玻璃文庫蔵

大阪湾の防備と台場展

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)

和田岬砲台は、大正10年(1921)3月3日、五色塚古墳などとともに兵庫県下で初となる国の史跡に指定されました。本展は、その指定から100年を迎えることを記念して開催するものです。

幕末の台場築造

砲台とは、その言葉の通り、大砲を設置するための軍事施設ですが、当時の呼称としては「台場」のほうが一般的でした。東京の「お台場」は、まさに幕府が江戸湾防備の拠点として築いた「品川御台場」に由来します。黒船と称される異国船の軍事的脅威に対処するため、日本沿岸に築造された「台場」は1000基に及ぶといわれていますが、その一割を超える100基以上が、実は大阪湾岸や京都にいたる淀川筋に築かれています。しかも、それは嘉永6年(1853)のペリー来航から明治維新までのわずか十数年間のこと。つまり、この時期、大阪湾岸地域の軍事的・政治的重要性は、それだけの高まりをみせていたのです。

台場築造—2つの波

ただし、その築造時期には2つの波があり、それぞれの政治的・軍事的背景には大きな違いがあります。

最初の波は、大阪湾内への異国船の侵入を防ぐことが最重要課題となる嘉永6年から安政(1854-1860)期にかけて。大阪湾への入り口となる紀淡海峡や明石海峡に所領を持つ和歌山藩、徳島藩、明石藩によって台場の整備が進められます。

いまひとつは、天皇に確約した攘夷実行を具体化するため、幕府が直接、大阪湾防備に乗り出す文久3年(1863)以降。この時期も異国船対策を建前とはしますが、そこに込められたメッセージは、外国に対してだけのものではありません。

「将軍の武威」を発信する装置

それは、幕府の台場政策にうかがえます。幕府自ら築いた和田岬と湊川崎、西宮、今津の四台場には、世界の軍事史上「マルテロタワー」(和名では石堡塔)と称される最新の構造が採用されています。また、明石藩や尼崎藩など、この海域に所領を持つ大名や警備に就く大名にも、堅

牢で巨大な洋式台場への改築や新規築造を求めています。

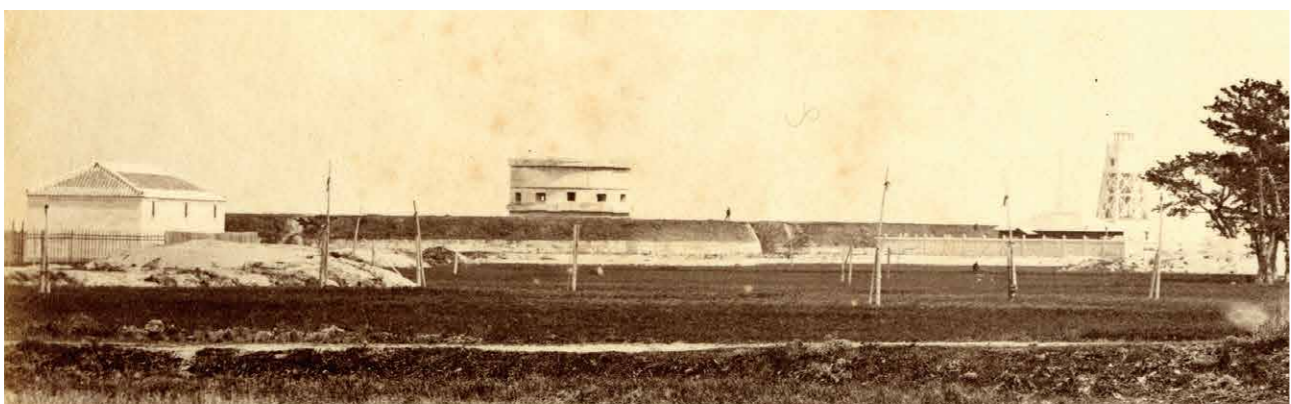
当時の幕府は、長州藩をはじめとする尊王攘夷派と政治的対立を深める中で、自らが天皇を守る主体であることを示す必要に迫られています。さらに、孝明天皇が強硬に反対する兵庫開港を実現するためにも、大阪湾岸から京都にいたる政治空間を近代的台場群の威容で装飾し、「将軍の武威」を国内外に発信することが、幕府には強く求められていたといえるでしょう。

近代的台場を実現させた日本の技術

では、最新の構造を持つ台場の築造はどのように進められたのでしょうか。近年行われた和田岬砲台の解体修理事業や研究の進展により、その状況が明らかになってきました。和田岬砲台の設計を担ったのは、勝海舟や長崎海軍伝習所に学んだ蘭学者佐藤与之助ですが、彼の設計を実現に導いたのは、意外にも？石工や船大工、左官、鋳物師といった日本の職人たちだったのです。

本展では、こうした新たな研究成果も踏まえ、大阪湾岸に築かれた台場の知られざる姿を紹介していきます。

(高久 智広)



「和田岬砲台写真」(部分) 1870年代初め 当館蔵

神戸源平巡り

『平家物語』の舞台を訪ねて

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)

神戸は源平の町だった？

モダンでハイカラな港町。現在、多くの方が持っている神戸のイメージはきっとこのようなものでしょう。しかし、お洒落な洋服、洋菓子、洋風建築、音楽やスポーツ……、現在の神戸のイメージを形作るものは、神戸港が開港した1868年1月1日(慶応3年12月7日)以降に根付いたもので、その歴史は意外と短いのです。

では、それ以前の人々は神戸の地を訪れる際に、何を見たり、楽しんでいたりしたのでしょうか。今、知らない土地を訪れるとすると、見所や名所を紹介したガイドブックを手に取る方も多いのではないのでしょうか。それは昔の人々も同じだったようで、江戸時代に刊行された『兵庫名所記』(宝永7年「1710」刊記)や『撰津名所図会』(寛政8年「1796」刊記)は、当時の神戸周辺の名所を紹介したガイドブックです。それらを捲ってみると、今から800年以

上前に起こった源氏と平氏の戦い―「源平合戦」で活躍した武将たちの墓や慰霊のための石碑が多数掲載されています。江戸時代の神戸を訪れた人々は、源平の武将たちに思いを馳せていたのでしょうか。

激戦の地、生田森

神戸で行われた源平の戦いは、「一の谷の戦い」と呼ばれ、一の谷(須磨区)に陣取った平氏を、源義経率いる源氏が背後の坂を下り奇襲し、勝利したという『平家物語』のエピソードで有名です。しかし、この「逆落とし」の強いインパクトが、一の谷のみで戦闘が行われたかのような印象を生みました。一の谷は、広い範囲で行われた戦いの一場面であり、当館所蔵の「源平合戦図屏風一の谷合戦図」においても、画面の



月岡芳年「武勇雪月花之内 生田森えびらの梅」(部分) 慶応3年(1867) 当館蔵

端に描かれています。

平氏との戦いにおいて源氏軍の主力を率いたのは、義経の腹違いの兄の範頼で、旧生田川(現フラワーカード)を挟んで平氏軍と対峙していました。平氏は川を天然の要害として利用し、生田森(現在の生田神社付近)に陣しました。今の三宮駅周辺で、源平の主力が激突したのです。源氏方の梶原景季や河原兄弟はそこで活躍を収め、彼らに因んだ史跡が遺されました。

諸行無常、一の谷周辺

義経の奇襲により、平氏軍は総崩れとなり、先を争い敗走しました。この中で、有名な平敦盛と熊谷直実の悲話が生まれます。17歳の敦盛が討ち取られる戦の無常は、広く語り継がれ、それに因んだ史跡も遺されました。しかし、討死は敦盛だけでなく、多くの平氏の武将たちが神戸で最期を迎えました。生田森・一の谷からの敗走ルート上の兵庫区・長田区・須磨区には、墓や慰霊碑が遺され、彼らが偲ばれていました。親を庇い討死した平知章、歌人としても有名で最期まで文武両道を貫いた平忠度などは、後世において武士の鑑と讃えられ、塚や碑が一人につき複数建てられるほどでした。

今日も遺る神戸の源平史跡

『兵庫名所記』『撰津名所図会』に掲載されている神戸の源平史跡は、開港後も人々の関心を集めました。当館が所蔵する、明治から昭和に発行された、神戸の名所を写した絵葉書においても、源平史跡が紹介されています。それらは、近隣の住民を中心とする人々によって大切に守り伝えられました。都市開発や震災を経た今日でも、私達はその場で源平の武将たちを偲ぶことができます。

本展では、当館が所蔵する資料を通じて、神戸で活躍した源平の武将たちの姿を紹介し、彼らがどのような人々に興味を持たれ、愛され続けられたか迫ります。新型コロナウイルス感染症の影響により、遠出がしにくい今だからこそ、身近な地域の歴史を訪ね、楽しむきっかけに本展がなれば幸いです。ご期待ください。

(三好 俊)



「須磨一の谷敦盛塚」(「神戸名所絵葉書」のうち) 大正時代後期～昭和時代初期 当館蔵

美術

コレクション展示

人物表現の洋風趣味Ⅱ

令和2年10月3日(土)～
11月23日(月・祝)

異国趣味のやきもの―京阿蘭陀

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)



「藍絵花卉文四段重」文化13年(1816) 箱書

生誕320年 俵山

令和2年12月5日(土)～
令和3年1月24日(日)

俵山(1702―178)は大坂出身の書家・画家・篆刻家・曹洞僧で、18世紀の京・大坂で活躍しました。当代きつての文人の一人であり、書画・篆刻の優品を多く遺しています。長崎で熊斐に南蘋風花鳥画を学び、禅僧の墨戯といえる水墨画も手掛けるなど、長崎出身の黄檗僧・鶴亭との共通点が見て取れます。生誕から数え320年を迎えるにあたり、近年収集を進めてきた作品をはじめ、当館所蔵の俵山作品を一室に展示いたします。

俵山筆「海棠牡丹寿帯鳥図」安永3年(1774)



コレクション展示

びいどろ・ぎやまん・ガラス

輸入ぎやまん

令和2年10月3日(土)～
11月15日(日)

あかり・ランプ

令和2年11月17日(火)～
令和3年1月24日(日)

明治時代はじめ、西洋文化が伝わる中で、私たちの生活に、ガス灯や電灯なども普及してきます。光を透過するガラスは、あかり・ランプにとって最適の存在だったのです。卓上や吊りランプ、火舎、電気笠などの作例とともに、成形や加飾技法についてもご紹介します。



「グラウユール松鶴文ランプ火舎・金赤油壺ランプ台」明治時代中期―後期(1883―1912)

手彫り切子の名品

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)

「切子」とは、ガラスの表面をカットして意匠を施す技法です。江戸切子や薩摩切子をイメージされる方もいるかもしれませんが、ヨーロッパ諸国との交流が限られた江戸時代の日本では、水溶性金剛砂を用いて棒状工具を往復研磨することで加飾する、時間と労力を要する方法を採っていたと考えられています。

機械彫りにはない、柔らかく、温もりに満ちた、江戸時代の手彫り切子の輝きをお楽しみください。



「手彫り切子藍色被せガラス蓋物」江戸時代後期―明治時代前期(1844―87)

古地図

旅と名所

令和2年10月3日(土)～
11月23日(月・祝)

江戸時代、多くの人々が旅に出るようになりまし。旅が盛んになるにつれて、案内図や名所記が刊行されるようになりまし。人々は絵図や名所記を購入して、旅の行程を考えたりしたのでし。今回は旅に関する絵図を展示しまし。みなさまも旅に出た気分でお楽しみください。

江戸時代の都市図

令和2年12月5日(土)～
令和3年1月24日(日)

三都と呼ばれる江戸、大坂、京。これらの大都市をはじめ、各国の城下町などの都市が多く形成・発展し



「東海道路行之図」
寛文年間(1661-73)頃

図皿が数多く作られ、今日では多くの伊万里焼地図皿をみることができまし。当館が所蔵するさまざまな地図皿をご覧ください。

た点が、江戸時代の特色です。都市を描いた「都市図」は、近世に作られた地図のなかでも主要なカテゴリの一つです。豊富な情報を精細に記した大型の図から、持ち歩きしやすい小型の図まで、多様な都市図をご紹介します。

地図皿、ざらり

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)

地図皿とは、地図の意匠があらわれたお皿のこと。その始まりは宝暦年間(1751-64)に平賀源内が指導して作られたとされる源内焼にあるといわれています。その後、天保年間(1830-44)になると、肥前国有田で伊万里焼の地

考古・歴史

古墳時代の造形

令和2年10月3日(土)～
11月23日(月・祝)

3世紀後半頃、権力をもった王(オウ)が各地で生まれた古墳時代を迎えます。王の死にあたっては、「前方後円墳」と呼ばれる大きな墓が築かれ、その大きさは、権力の強さを示すと考えられています。供えられた豪華な品々など、王を装った威信財を主とした古墳時代の造形をご紹介します。



「馬形埴輪」伝茨城県出土
6世紀後半

建造物の設計と意匠

令和2年12月5日(土)～
令和3年1月24日(日)

建造物は、平面、デザイン、材料、構造といった要素の集合による3次元の立体構成物です。一方で、2次元表現である設計図面の仕上がりからは、設計者が建築主の意向を受け

ながら、設計を進めていく過程での意図、工夫や苦労などが読み取れます。当館にも縁の深い設計者が残した図面から、建物の魅力を改めて探ります。

神戸と清盛さん

令和3年2月6日(土)～
3月28日(日)

平安時代の末頃、日本初の武家政権(平氏政権)を打ち立てたとされる平清盛(1118-81)。この人物のイメージは、「おごる平家は久しからず」などの言葉に象徴されるように、決して良いものではないようです。しかし、神戸では「兵庫開発の恩人」と評され、親しみが持たれています。清盛はどのように歴史に上捉えられ、神戸で受け止められてきたのか、当館所蔵資料から覗いてみたいと思います。



月岡芳年
「芳年武者無類 平相国清盛」
明治10年(1877)

「ギャラリートークをはじめまし」

神戸市立博物館が7月からはじめた新しい試み、「ギャラリートーク」をご存じでしょうか。

昨年11月にリニューアルオープンした博物館は、ナイトタイムエコノミー事業として、毎週金曜日は20時まで、土曜日は21時まで、開館時間を延長しています。ギャラリートークもその一環として、博物館の魅力をさらに発信するべく実施しているのです。

今年度は、まだ収束の兆しが見えない新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、博物館のさまざまなイベントが中止となりました。現在は、予定しているイベントについて、どのようにすれば開催できるかを検討していますが、少しでも博物館を楽しんでいただきたく、まずは小規模でできることとして、ギャラリートークを企画しまし。

ギャラリートークでは、参加人数を10名に制限し、参加者同士の距離を確保するため、床面に立ち位置を指定するマークを設置しています。さらに、マスクの着用、感染者が発

生した場合に備えたお名前と緊急連絡先の情報提供などの対策を講じ、協力をお願いしています。

毎週土曜日17時から、学芸員が、展示室で、20分ほどの展示解説を行つています(※)。解説の後には参加者からの質問にお応えする時間も設けています。1階の神戸の歴史展示室と2階のコレクション展示室で、週ごとに場所を変えながら実施していますので、毎週楽しんでいただけます。コレクション展示室は観覧料が必要ですが、1〜2か月ごとに展示が替わるため、同じテーマのギャラリートークには、もしかしたら二度と巡り合えないかもしれまし。

この原稿の執筆中には、7月3日目のギャラリートークが開催されました。テーマは「神戸の中世」。神戸の歴史展示室にある居留地模型の三宮神社や、展示中の浮世絵「太平記英雄伝 荒儀撰津守村重」などを示しながら、中世の武士や、神戸でおきた源平合戦について、日本中世史を担当する学芸員が話しまし。



ギャラリートーク「神戸の中世」の様子

(永山 未沙希)

しばしば「一の谷合戦」などと言われますが、平氏が陣を置いて源氏を迎え撃つたのは生田森であつたことから、神戸の歴史展示室では、合戦の場所をより正確に表す「生田森・一の谷合戦」という名前を使っていること、博物館から近い三宮神社には、この生田森・一の谷合戦で平氏方の陣への一番乗りを果たした源氏方の武将・河原兄弟の塚があることなどを解説しまし。展示解説に書ききれなかつた学芸員の思いや情報を存分にお伝えできることが、ギャラリートークの魅力ではないでしょうか。

感染症対策をとりながら、今後もギャラリートークを開催していきます。みなさまのご参加をお待ちしています。



ギャラリートーク「描かれた動物たち」の様子



ギャラリートーク「地図を作る人 長久保赤水」の様子

※開始時間の変更されることがあります。参加を希望される時はあらかじめ博物館ホームページ、または公式フェイスブック・ツイッターをご確認ください。

神戸市内出土の土錘について

―古墳時代から鎌倉時代の漁撈の変化を考える基礎資料―

神戸市内の海辺に近い遺跡を発掘調査していると、円筒形や棒状の奇妙な形をした素焼きの土製品をしばしば見出します。

それらは土錘と呼ばれる魚を獲る網に付ける重りです。

形状や大きさはさまざまですが、土錘の概略を説明します。

一、土錘の種類

管状土錘
細い木の棒などに、粘土を竹輪状に巻きつけ、整形して焼きます。棒を通していた孔の部分に網網を通して、様々な大きさのものが、あり、小型は投網、刺網、大型は船曳網、地曳網などの袋網、定置網などに用いられました。

棒状（有孔）土錘
棒状の粘土の両端に2〜5mm程度の小孔を開け、網に括り付ける紐か網網を通します。主に刺網に使用されていたと考えられます。

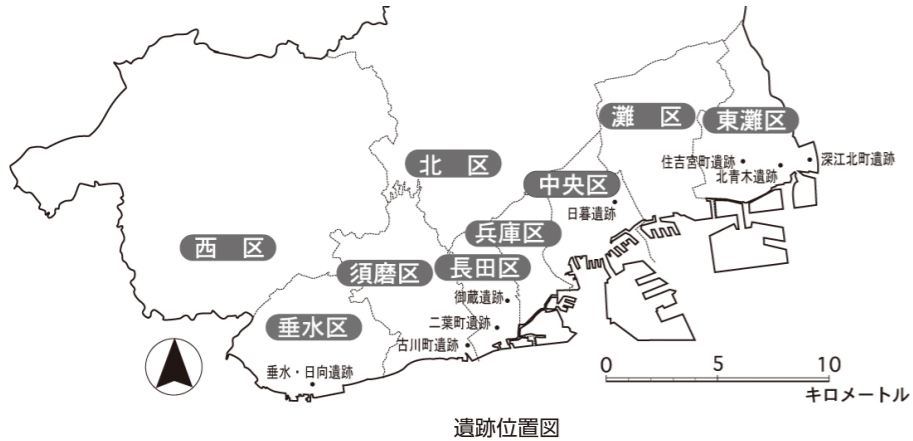
有溝土錘

上から見ると、ラグビーボールの

時代前期頃には入り江の北側に位置していたようです。

土錘は大小の管状土錘、棒状土錘（長短あり）、有溝土錘、少量の飯蛸壺が出土しています。

当遺跡は、出土品などから古代の役所関連の施設や在地の有力者の屋敷地の可能性が高く、漁撈を生業の中心とするムラと断定することは難



遺跡位置図

ような形をしています。真中に溝が設けられ、網をはめ込むようになっています。小型のものは刺網、大型は曳網に使用されたと考えられます。

二、遺跡で出土する土錘の変遷

神戸市内の土錘が出土した遺跡のうち、代表的なものを時代順に挙げます。特に、土錘の変化が顕著な古墳時代前期〜鎌倉時代頃の遺跡を対象に述べます。

① 須磨区 古川町遺跡

神戸市内の海岸線の大半は埋め立てが行われているため、この遺跡から現在の海岸線までの距離は500mですが、古墳時代には海岸線直近の小高い砂丘上に位置しているムラでした。古墳時代初頭〜前期の土器と共に、管状土錘やコップ型の飯蛸壺が出土しました。

② 東灘区 北青木遺跡

現在の海岸線から遺跡までは40m離れていますが、当時は海岸線直近でした。低い砂丘が海水の浸入で途切れた部分（滞筋）から古墳時代前期の土器と共に管状土錘が出土しました。

③ 東灘区 住吉宮町遺跡

神戸市内出土の土錘から見ただ各時代の漁撈の特徴をまとめます。
三、まとめ
古墳時代前期
当該期の2遺跡で発見された管状土錘は、袋網（曳網）系の土錘と考えられます。土錘の大きさ・種類が単一で、網の種類が少なく、捕獲する魚種や漁場が限定されていたことが判ります。コップ型の飯蛸壺が相伴しています。

古墳時代後期〜飛鳥時代

棒状土錘が多く、刺網による魚の捕獲が中心であったと想定されます。捕獲する網、魚種、漁場などに変化があったものと考えられます。少量の釣鐘型の飯蛸壺が出土しています。

奈良時代〜平安時代前期

管状土錘の種類が豊富で、小型は刺網・投網、大型は曳網、定置網に使用されました。棒状土錘は長短の二種類を、使用する漁場の海底や海流の状況に応じて取り換えていたことが判ります。有溝土錘は刺網用と袋網（曳網）用があります。網漁の

現在の海岸線から遺跡までの距離は1.4kmですが、古墳時代〜飛鳥時代には1km足らずの距離でした。堅穴住居跡などから管状土錘と、棒状土錘が出土しています。

奈良時代〜平安時代前期

現在の海岸線から遺跡までは500〜600mです。古代には、周辺に小高い砂丘と菅原の湿地が広がっていました。

④ 東灘区 深江北町遺跡

管状土錘は小型と大型のものがあります。棒状土錘は長・短があり、海底の土質の状態（砂質、岩礁など）を使い分けていたようです。

有溝土錘は大小2種類が出土しました。また網に取り付ける木製の浮子が見つかったことも注目されます。湿地より出土した木筒などから、単に漁撈に従事する人々が暮らすムラではなく、古代の役所関連の施設（駅家）を持つムラを想定することが妥当と思われる。

平安時代前期

⑤ 長田区 御蔵遺跡
この遺跡は、現在の海岸線から2km隔たった場所にありますが、平安

方法が確立し、様々な網で漁撈を行う様になった網漁の画期と言えます。
平安時代前期〜後期
多様な管状土錘が出土し、前代と同様に網の種類が増えていたことが判ります。棒状土錘は長短の2種類を、海底の状況で使い分けていました。有溝土錘は袋網、曳網、定置網などに使用されたようです。飯蛸壺の出土は少量です。

平安時代末〜鎌倉時代
管状土錘は小型（刺網・投網）と大型（袋網系）に分化して、地曳網などの袋網がこの段階で大型化したことを示し、網漁の規模拡大の画期を迎えています。棒状土錘は、使用頻度が低下したことが窺えます。また、飯蛸壺と共に、真蛸壺が現れます。

以上から、神戸地域の土錘から見た漁撈の大きな変化は古墳時代後期〜飛鳥時代、奈良時代〜平安時代前期、平安時代末〜鎌倉時代に起こると考えられます。

小さな土製品ですが、実は多くの情報を引き出すことができるところが、土錘の魅力です。

（谷 正俊）

須磨区 鉢伏山（畿内の西限）

須磨の街並みの西に聳える鉢伏山（標高252m）の南麓は、六甲山系が海岸と接する険しい地形となっています。山陽電鉄本線、国道2号、JR山陽本線の三本の交通の動脈が通過する狭隘なこの地は、青く広がる大阪湾に浮かぶ淡路島や友ヶ島、遠く二上山や金剛山系、紀伊の山並みを一望する美しい風景と共に、数々の歴史の舞台となりました。



鉢伏山（右）と須磨海岸

鉢伏山頂の須磨区鉢伏山遺跡や須磨浦公園西側の境川遺跡からは、土器や石器などが見つかっており、古くから人々の生活の場であったと考

えられます。1階「神戸の歴史展示室」の境川遺跡出土土器は、市内でも数少ない、縄文時代早期（約1万年前頃）の考古資料です。

現在の「近畿地方」の由来ともなった「畿内」は、古代中国で王城とその周辺の特別地という意味で、わが国では大化2年（646）に設置されたといわれています。『日本書紀』大化2年正月甲子条の改新の詔には、「畿内」の範囲が定められ、その西限は「赤石（あかし）の櫛淵」とされています。鉢伏山南麓から明石市大蔵谷にかけて続く山塊が迫る険しい海岸線から、「赤石の櫛淵」をこの地域とする説があります。

鉢伏山の南麓を流れ落ちる境川は、摂津と播磨の国境であり、畿内と畿外との境でもありました。鉢伏山の山上に昭和32年（1957）に開園した須磨浦山上遊園の観光リフト（昭和34年開通）の駅名が「せつつ」と「はりま」であるのは、国境に因んだもので、国境を流れる川が境川と呼ばれる例は全国にみられます。



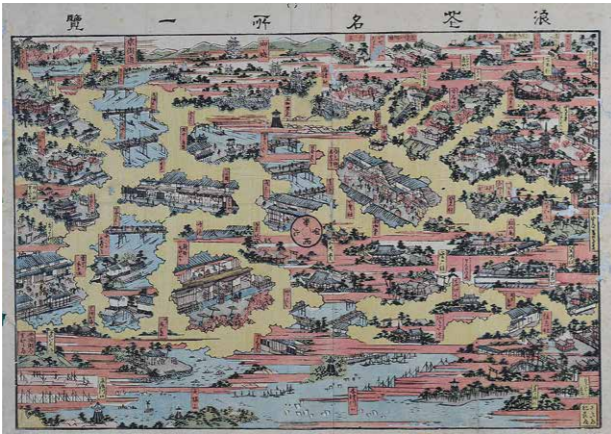
けんぶんろくまっぷ

奈良時代に整備された「山陽道」は都と九州の大宰府を結ぶ幹線道路で、公用の役人が馬の乗継や宿泊するための施設である駅家が、三十里（約16km）ごとに置かれました。

須磨区大田町遺跡では、「山陽道」の側溝と考えられる溝が見つかり、付近には須磨駅家の存在が推定されています。さらに明石駅家へと道は続きますが、この間の経路はよくわかっていません。海岸線を通る説、険しい海岸を避けて須磨区板宿町から妙法寺川沿いに白川峠を経て西区伊川谷町、明石市太寺へと出る説や、鉢伏山北側を進み垂水区多井畑から南下して塩屋町に出る説など諸説ありますが、いずれの説も鉢伏山付近が畿内と畿外を結ぶ重要な交通路であったことを物語っています。都から西へ。六甲の山並みを右に

新収蔵資料

浪華名所二覧(内題)



法量 34.6 × 48.7 cm
匡郭 30.9 × 45.9 cm

幕末の大坂では、まちな名所を案内するために、一枚刷の名所図が編まれています。友嶋松旭が図を担当とした「浪華名所二覧(内題)」はその代表です。本図も、大坂の名所を图示したも

ので、視点を大阪湾岸に据えて、市中を俯瞰した描写となっています。図中にある文字注記は、81カ所を数えることができます。しかし、市中へ入る陸の道筋として「平野道・藤井寺道」など5カ所、海からの進入路としての「安治川口」「木津川口」の2カ所を確認できるので、名所の記載とすれば74カ所ということになるのでしょうか。

当然のことながら、名所として多く取り上げられているのは「四天王寺七堂がらん」(図1)や「住吉社」といった寺社です。また、大坂市中を縦断していた大川や東・西横堀などに架かる橋も名所でした。大川に架かる公儀橋の「京はし」「天満はし」「天神はし」をはじめ、「四ツはし」などがそれです。これ以外にも高麗橋の傍らにあった「矢ぐら屋敷」、釣鐘町の東南にあった火の見櫓「上町火ノ見櫓」も图示されています。これらの構造物は、名所であるとともにランドマークとしての役割を果たしていたと考えられます。

「矢ぐら屋敷」の西側、高麗橋一丁目には、呉服屋大手の「いわき」「三ツ井」があり、さらには「とらや」まんじゅうがみえます。当時の商業中心地の風景でもあります。

多くの名所は、大坂の町が近代化していくなかで姿を消してしまいました。しかし、往時の景観を知る上では、このような一枚摺の資料もそれを知る縁となるでしょう。今年、春先からのコロナ禍で、自らまち歩きも自粛していました。いずれ、本資料のような一枚摺のデータを片手に往時の景観を訪ねてみたいと思っています。

(小野田 一幸)



図1 四天王寺の伽藍

活動記録



2020年2月20日
ミュージアム講座「地図の近代」



2020年2月22日
こうべ歴史たんけん隊「建築の魅力を探ろう!」

見ながら進んできた道は、鉢伏山を眼前に、六甲山系と海岸線が西へ向かって狭まった「畿内の西限」に達します。都を去る人にとっては、この地で畿内と別れを告げることになったでしょう。反対に都を目指す人は畿内の風景を目にすることになります。鉢伏山を見ながら、都を去る人、都を目指す人。青い海とその向こうに、はるかに見える畿内の山々と風景を眺めて、人々ほどの様な想いでこの地を往來したのでしょうか。『万葉集』などに詠まれた数々の歌や、この地が物語の舞台のひとつとなった、『源氏物語』や『平家物語』などには、美しい風景と共にこの地における人々の想いが表れているようにも思われます。

鉢伏山とその周辺には、東に須磨寺の名で親しまれ、数々の寺宝を有する福祥寺があり、一ノ谷町付近は一の谷合戦「逆落とし」の舞台とされ、平敦盛と熊谷直実の悲話で知られる敦盛塚が国道2号沿いの木立の中に所在しています。また、与謝蕪村や松尾芭蕉、正岡子規など数々の歌人の碑があり、桜の名所で知られる須磨浦公園など、数多くの史跡や名所が点在しています。

(阿部 功)